

チャールズ・ブロックデン・ブラウンと所有の不安

Charles Brockden Brown and Uneasiness of Possession

折島 正司

Masashi ORISHIMA

はじめに

チャールズ・ブロックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown) (1771-1810) に、「夢遊病、断片 (“Somnambulism, Fragment”)」という小篇がある⁽¹⁾。

好きな女性が他の男性のところに行くのを押しとどめたい、この気持ちが暴力的な形をとるかもしれないという不安を持つ男がいる。そうした危険に気をつけなさいと女性に注意してあげ、心配してあげる男がいる。この二人は一人の男の中にいて、お互いを知らない。最初のほうの男が女性を夜道で襲って殺し、あとのほうの男が探偵よろしく犯人を推理する手記を残している。意識の二重性の話、社会に知られた自己と社会から隠された自己が分離しているという話だ。

この断片の基本的構図は、『エドガー・ハントリー (*Edgar Huntly*)』(1799)の忘れがたいエピソードと同一である。夢遊病に陥ったエドガーは、夢遊病に陥っていない時のエドガーが所有する小箱の中からワルドグレイヴ (Waldegrave) の手紙を盗む。夢遊病から醒めたエドガーは、手紙のないのに驚愕する。「引出しをあけて包みがなくなっているのがわかったとき、どれほど驚き、困惑したか、お前には想像つくまい。もう一度丁寧に見た。中に手を入れてみた。でも空だった。どこへ行ったのか？誰が盗んだのか」(134)と、彼は許婚者でワルドグレイヴの妹であるメアリー (Mary) に書きおくっている。ずっとのちになってサースフィールド (Sarsefield) が説明してみせるように、「彼 [エドガー] が持っていた手稿を動かしたのは、彼でしかありえない。隠し場所どころか、手稿があることさえ、世界中に他に知っている者はいなかったのだから」(249)、手紙を盗んだのはエドガー自身にほかならない。しかしエドガーは、夢遊歩行中のエドガーの行為を知らない。夢遊歩行するエドガーの存在も知らない。ここでも社会に知られた自己と社会から隠された自己が、明確に分離している。

かなり明瞭なこの同一動機の反復は、ブラウンの全小説を通じて起こる多くの同一動機反復の一例にすぎない。ブラウンでは、いろいろな小説内に、同じような動機、主題的なユ

ニットが、くり返し現れる。そこで、ブラウンの小説を読んでいると、よく知らない土地で見覚えのある人に行きあったような感じに、しばしばとらわれる。何だか妙な感じがする。

彼の場合、小説ひとつひとつを完結したものとして検討するよりも、小説群全体を一時に相手にして考えるほうが、印象をつかみやすいかと思われる。レスリー・フィードラー (Leslie Fiedler) が、『エドガー・ハントリー』に与えた「うっとりするほど、頭が変になるほど、秩序の解体した本」(157)という判定は、ブラウン全体の核心を一撃でとらえている。その一方で、ジェーン・トムキンス (Jane Tompkins) が『ウィーランド (Wieland)』(1799)を評して、「[そ]の中で起こる出来事は、アリストテレスの言うように原因と結果として結びついているのではない。あるひとつの観念的な主張の変奏として、くり返し提出され、徐々に熱がこもりつついつまでも続く」(Tompkins 61)とした洞察、すなわちブラウンの小説は構造的にこそ読まれるべきであり、単一の主題的主張の反復的変奏として互いに相同性を示す要素同士の関係に注目すべきであるとした洞察も、正しい。この作家の場合、個々の作品の秩序を解体して検討することが、作品群全体の秩序に迫ることになる、とそう考えられる。ひとつひとつの小説のプロットや主題や登場人物は一貫性や連続性を欠いていることが多いけれど、小説群全体の中で幾度も行きあうことになる動機、反復使用される主題的ユニットは数多いし、そうした動機同士には何やら相互関連があるように感じられる。

社会に知られた自己と社会から隠された自己の分離

そこでまずは、社会に知られた自己と社会から隠された自己を分離することができる、ということについてである。

「夢遊病」と『エドガー・ハントリー』に共通しているのは、「自分のしていることを自分で探索する」という動機だ。この動機は、「他人のしていることを探索する」好奇心の動機の変奏のひとつであると捉えることができる。

「他人のしていることを探索する」という、より包括的な動機の方は、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) の『ケイレブ・ウィリアムズ (Caleb Williams)』(1794)から『アーサー・マーヴィン、第一部 (Arthur Mervyn, First Part)』(1799)に直輸入されている。ケイレブ・ウィリアムズが恩人フォークランドの正体に好奇心を覚えて、禁じられた領域に首を突っこむように、マーヴィンは、恩人を見たところ紳士のようなウェルベック (Welbeck) の素性に疑惑を抱き、彼が「娘」だと称している女性の部屋に侵入して何かを探そうとする。と言っても最初から侵入しようとしているわけではない。胡散臭いウェルベックから逃れて田舎に帰ろう。それについては、書置きをしておこう。それについては紙とペンがいる。ウェルベックの部屋から借りよう。というようなわけで、階段を上っていると、

何も音はしなかった。ろうそくを手にして階段を上りはじめた。最初の踊り場に行きつく前に、ウェルベックを真夜中に彼の娘の部屋の戸口で見たことを思いだした。その部屋は今は無人だ。入れるかもしれない。もしそうなら、入っても別に害はない。強い好奇心を覚えたが、特に何に対してというのではなかった。三歩歩けば戸口に至る。錠が下りているかどうか確かめるのは、造作ないだろう。ちょっと手間をかけて確かめてみれば、ひょっとして何かが中で見つかるかもしれない、ふとそう思いうかんだ。手をかけてみるとドアはあっけなく開いた。そこで中に入った。(82)

というような次第である。ここには、「他人のしていることを探索する」動機が、ほとんど剥きだしで現れている。

『オーモンド (*Ormond*)』(1799) に題名を提供している人物オーモンドも、他人のことを探索する。彼は、その目的を達成するために、他にも方法はあるであろうと思われるのに、というかそんな方法だけはあるにえなさそうと思われるのに、第 14 章で黒人の煙突掃除人に化けてコンスタンシア・ダドリー (*Constantia Dudley*) の居室に潜入し、彼女の家庭を観察する。オーモンドの習慣について、語り手は言う。

家庭に入りこみ、油断しているところを観察する、何より簡単で効き目のあるやり方があった。準備もあまりいらぬし苦労もない。また、この変装はこの上なく見破りにくかった。彼はこの職の見習いのようなことをときどきやったことがあり、仕事をらくらくとこなした。それは思いもおよばぬほど完璧で奇怪な変身だった。社会の最上階から最下階へ降りて行き、自身の姿かたちを、オウィディウスばりに遠い姿かたちへと、移行させることだった。端的に言うと、彼はときおり、肌の色と服装を黒人の煙突掃除人のものに変え、仕事を求めて人様の門に立ったのである。(133-34)

オーモンドには、他人の家庭に入りこむことも可能なら、他人を家庭ごと自分の観察圏内に移動させることも可能である。コンスタンシア父娘を住ませた屋敷の壁には秘密の通路があって、オーモンドはそこから彼らの行動を観察する。第 28 章、コンスタンシアとの対決の場面で、オーモンドはコンスタンシアに、「あなたの父親の部屋のクローゼットには、そこに入れる人の知らないドアがついていた。ヘレンが生きていたとき私が命じて付けたものだ。ここを通過して、私は位置につき、あなた方の会話をすべて盗み聞きしたものだ」(281) と言う。全体として、コンスタンシアのインテグリティを監視するのが、オーモンドを駆動

する動機であると想像される。

『オーモンド』についてさらに言うなら、断片のひとつ「隠遁者(“The Man at Home”)」(1798)に現れ、小説『オーモンド』にはほぼそのまま取りこまれているバクスター(Baxter)のエピソードがある。黄熱病流行の年、1793年のフィラデルフィアに住む元兵士バクスターは、隣家に住む老人と若い女性の二人を気にしている。ある夜、隣家の庭で誰かが動いているのを察知して心配になり、のぞきに行く。

その屋敷の一方は、雑草が生えてゴミの散らかった空き地になっていた。彼はここに赴く。そして、戸口に正対する場所の垣根の上に首を出し、かなり根気強く待った。何かの前触れなり兆候なりがあったら、次に何をするか決められるかと思ったのである。

人生にはよくわからない光景がたくさんあるものだが、夜の夜中に垣根の上に首を載せて、黙って動かずに暗くて陰気な家をじっと見つめている男というのは、動機に不審を抱かせるためにそこにあるような物体であった。(67)

垣根の上に首だけ出して若い女性の住む隣家の庭を(善意で?)視察しているバクスターこそ、「他人のしていることを探索する」動機のエピトミーである。『ウィーランド』のカーウィン(Carwin)が、なにかというところろに潜んで、クララ(Clara)の様子をうかがう(第6章、第9章)ことも、容易に思いだされる。『エドガー・ハントリー』のメインプロットらしきものも、クリゼロ・エンディ(Clithero Endy)の正体を探索するエドガーの行動からできている。

「他人のしていることを探索する」こうした行動は、通常プライバシー(社会から隠された自己の秘密)の侵害と理解されるであろう⁽²⁾。他人が所有している社会から隠された自己を、みずからの所有に移行しようとしているからである。「自分のしていることを自分で探索する」という、『エドガー・ハントリー』の小箱のエピソードや「夢遊病」の動機においては、社会から隠された自己の秘密の所有をみずからに取りもどそうとしている。なぜそのようなことが起こりうるかといえば、自己のしていることにたいして自己が多くの場合保有している支配能力や所有権のようなものが失われてしまったからである。

社会に知られた自己と社会から隠された自己が、前者が後者を所有するという関係で通常結合しているとするなら、ブラウンでは、このふたつは結合が不安定で、分離可能である。

「人間から、その所有しているものを分離する」という動機群

社会に知られた自己と社会から隠された自己を結合する（あるいは結合させそこなう）場合にとどまらず、ブラウンでは所有による結合関係が一般に不安定であると言えるだろう。というのも、「人間から、その所有しているものを分離する」という動機群が、ブラウンには顕著に見出されるからだ。

ブラウンの小説には、人の所有しているものをもとの持ち主に返そうとする人物が、過剰にと言っていいほど多数出現する。アーサー・マーヴィンが代表的である。彼は偶然大金を発見して、一瞬は儲かったと思うが、ただちに「だがこの金に、自分はどのような権利を持っているのだろうか」(128) と思いなおし、以後その大金を正当な所有者に返還しようとして行動する。自分の恋人を、もとの許嫁者のもとに返すことを、小説のなかでの唯一の目標としている人物もいる。『クララ・ハワード (*Clara Howard*)』(1801) のクララの行動は、終始一貫この動機に発して、けっして動揺しない。頑なな徳の主題系であろう。

だが、これが頑なであるのと同じ程度に純粹なのかどうかは、どこことなく疑わしい。そのことは、以前から議論的になっている。というのも、若くて貧しいイライザ・ハドウィン (*Eliza Hadwin*) から年上で裕福なアクサ・フィールディング (*Achsa Fielding*) へと愛情を移動させる第一部のマーヴィンと第二部のマーヴィンを典型として、同一人物がいつしか非常に矛盾した行動をとるようになることもあるうえに、あからさまに徳とは正反対の行動をとる人物もふんだんに出てくる、というより徳と正反対の行動をとる人物を思いだすほうが、むしろ容易だからだ。

人の所有しているものを元の持ち主に返そうとする人物の正反対には、人の所有しているものを取ってしまう人物たちが頻出する。『エドガー・ハントリー』のワルドグレイヴは、思いがけない財産を残して死ぬが、じつはウェイマス (*Waymouth*) という知人から預かった財産を、横領していたらしいとわかる (第 14、15 章)。『オーモンド』のクレイグ (*Craig*) は、コンスタンシアの父スティーヴン・ダドリー (*Stephen Dudley*) の財産を、文字通り詐取する (第 1 章)。『アーサー・マーヴィン』のウェルベックは、人の所有しているものを取ることを人生の主目的として生きているような人間で、ヴァンサン・ロディ (*Vincent Lodi*) という瀕死の外国人からその妹へと託された大金を横領する。ウェルベックこそこの種の人物の典型であろう。少々長くなるが、横領を正当化するウェルベックの奇妙な論理に付きあってみたい。大金を手にしてうっとりしたウェルベックだったが、その後すこし考える。

私はこの金が自分のものではないということを忘れていた。かならず頼みに従うと誓いを立てたうえで、私ではない人間に渡してくれと託された金だということを忘

れていた。これをこのまま持っているのは、泥棒と同じだ。死んだ人物の妹が正当な権利の持ち主だ。彼女を探しだし、金を全部彼女の所有に帰して、暗黙ではあるが聖なる私の責務を遂行することが、私の義務である。

この結論は私の希望とあまりにも正反対の方向を向いていた。そこで強力にこれと戦うこととした。人の財産の相続者を確定する能力を、人に与えるものはなんだろうかと、私は問うた。生きている間であれば、現実の所有権を移譲することができるかもしれない。しかし、死んでいなくなったなら、偶然が財産をその手に委ねた人間こそが、純正の所有権者である。(AM 94)

その時それを手にしている者がそれを所有している者であるという通常とは異なる論理を好むのは、「悪漢」ウェルベックだけではない。この小説の主人公であるマーヴィン自身も、ロディの父親が書きのこしたトスカーナ方言で書かれた手記を、わざわざウェルベックの部屋に侵入してなかば盗みだし、現代イタリア語など一言もわからないのに、田舎に持っていく、ラテン語の知識から見当をつけて訳してやろうなどとする。「空想的で実現できそうもないように思えるかもしれないが、この作業は、実際にやってみると、私の能力の範囲内であることがわかった」(126)のだそうだ。先に触れたように彼は大金を発見するのだが、それは実は言葉をすっかりマスターして手記のほとんど終わりごろに差しかったとき、ウェルベックが糊付けして紙幣を隠していたページの間から見つけだされたものなのだった(126-27)。

ウェルベックは、他人の持ち物を奪おうとするだけではない。他人の声も奪おうとする。疫病に支配されたフィラデルフィアで病者を救援する活動中のマーヴィンは、もとのウェルベックの邸宅の中からコルヴィル (Colvill) という仇敵の声がするのを聞く。だが声の聞こえた場所に行ってみると、そこにいるのは、死んだはずのウェルベックだ。先ほど聞いた声は知っている悪党の声だ。悪党はどこに隠れているのかと問いつめると、ウェルベックは、「おやおや、私は善いことをするときも悪いことをするときも、協力者というものを持たない。ここには一人で来たんだよ」と答える。だがさっき答えた声は、知っている人間の声だと言うと、「君が聞いたのは私の声にはかならない。ここにはしたいことがあったのだが、それは人に見られては具合の悪いものだったんでね。見つかるのを避けたかったので、君が入れてくれと言うのを、偽の声で断ったのさ」(194)と返すウェルベックである。彼が言うところでは、それは最近病気で臥せっていたとき世話になった男の声で、「私のとは違う声を装うのが得策と思った。この声は私が一番最近に聞いた声でね。この声を選んだのは、そういう咄嗟の、意味のない事情なんだよ」(195)ということだ。このオウムか九官鳥の性質の解説のようなものが、ウェルベックによるよくわからない声色の動機の説明である。『ウィーランド』のカーウィンが駆使するのは、もちろん、腹話術であり、腹話術とは

術師のいる場所以外の場所から、術師以外の人物の声を出す技である。声を持ち主から取りはずし、他人に付着させることが可能であり、ウェルベックやカーウィンは、人のいる場所や人の発する声を奪っていると解することができる。

容姿の類似の動機も、同一の動機群に属している。『アーサー・マーヴィン』のマーヴィンとヴァンサン・ロディは、容貌が酷似している。ウェルベックの「娘（実はロディの妹）」の部屋に入り込んだマーヴィンは、「ミニチュアの肖像画」を見つかる。そして、「それが私自身の容貌と似ているのを見逃すのは不可能だった。あまりよく似ているので、一瞬、その絵のオリジナルは私だったのだと思ったほどだ」（82）とさえ思う。なぜ酷似しているのか、酷似しているから結局どうなのかといった説明のようなものは、与えられない。容姿の類似は一見無動機で、ただ似ているから似ているというだけだ。容姿を所有者から取りはずして、他の人物に付与できるかのようだ。違う人間が同じ容姿を持っているというより、同じ容姿を別々の人間に貼りつけることができるかのようである。

人の相続上の権利を取ってしまう人物も頻出する。『エドガー・ハントリー』のクリゼロは、ロリマー夫人 (Mrs. Lorimer) の放蕩息子が座っていた位置へ、息子にすり替わって入りこみ、ロリマー夫人から愛情をそそがれる。完全に息子にとって替わったとまでは言えないが、すくなくとも息子のほうが、まるで拭われたように小説から姿を消してしまうのは事実だ。クリゼロはさらに、ロリマー夫人の姪クラリス (Clarice) の許婚者となって、財産の相続上の権利に一層接近する（第4、5章）。

結婚相手の変更は、人の相続財産への接近、間接的な獲得と緊密に結びついている。そうした状況の典型的なものは、マーヴィンの『第二部』（1800）におけるふるまい、イライザのことを急に忘れて、年上で裕福なアクサ・フィールディングに赴くふるまいである。しかしエドガー・ハントリーもなかなか隅には置けない。エドガーは、最初ワルドグレイヴの妹メアリーとの結婚を通じて、財産上の安定した地位を獲得しようとしていたかに見えるが、ワルドグレイヴの財産が、本来他人のものであったことを知ったあと、どうもワルドグレイヴの妹を廃棄し、クラリスを新しい標的とし、一旦はクラリスの獲得に成功したかのようにみえるのである。

それを確認するためには、『エドガー・ハントリー』最終部の数章をやや詳しく読んでみる必要がある。『エドガー・ハントリー』はエドガーからメアリーへのおそろしく長い一連の書簡による小説である。それが第27章でようやく終わったかと思うと、そのあとに、エドガーからサースフィールドにあてた二通の手紙と、サースフィールドからエドガーへの一通の手紙が付されている。荒野（エドガーが複数のインディアンを殺戮した小屋）に隠遁したクリゼロのところに、よせばいいのに、のこのこと出かけて行って、ロリマー夫人とクラリスが今はニューヨークに住んでいるから会って和解しろなどと言い、結果としてクリゼロの破滅をもたらすエドガーのしくじりを、この三通の手紙によって読者は知る。そして小説

は、今度こそ本当に終わる。ところで、メアリーへの手紙からなる本編と、付加された三通の手紙が語るエピソードの時間的關係はどのようなものか？本編を終了させるメアリーへの最後の手紙には、ソールベリー (Solebury) 11月10日とある。ノーウォークの荒野でのエドガーの大冒険が終わった直後だ。その後に来るエドガーとサースフィールドのやりとりは、日付があいまいにされているが、第二信に「昨年中の数々の危険」(286)とあることから、年が変わったあとで書かれていると考えられる。ロリマー夫人が生きていることを神に誓えとクリゼロに強要されたエドガーは、「彼女と同じ家に数カ月を暮した」(289)のは間違いないと言う。どうも本編終了後数カ月の時間が経過しており、エドガーは本編中では見知らぬ他人だったロリマー夫人の家で長期間暮らしているようだ。しかもエドガーはサースフィールドに向かって、「私がソールベリーのイングルフィールドの家に来たことは、姪御さん〔クラリス〕からお聞きでしょう」(284)とも言っている。どうしてメアリーへの手紙の中ではエドガーが顔を合わせたこともないクラリスが、エドガーの所在をそんなに詳しく知っているのか？エドガーは、本編終了後の数カ月の間に、クラリスへの大接近に成功したと推測するのが、もっとも合理的ではなかろうか。

家族の財産の相続権よりなにより、インディアンの部族が継承してきた広大な土地についての権利を奪いとった記憶を、ブラウンから拭いさることは難しいようだ。『エドガー・ハントリー』に描かれる18世紀ペンシルバニアの辺境ソールベリーの住民は、インディアンの土地を篡奪してそこに住んでいる。「オールド・デブ (Old Deb)」またの呼び名を「クイーン・マブ (Queen Mab)」というデラウェア族の老女がいて、彼女は、彼女の氏族がオハイオ河谷に追いやられたのちも、デラウェア川流域に一人とどまっている。

この女性はずっとデラウェア族つまりレニレナビー族に属していた。このあたり一帯はすべて、かつてこの部族の支配権に含まれていた。30年ほど前、イギリス人入植者から土地を蚕食されつづけて、彼らは遠い昔からの居場所を捨て、ワバシュ川、マスキングラム川のほとりに退いた。

移住を協議して決めたのは部族の総会議だったが、たった一人の女性を除いて、全員がそれに同意した。彼女の発言を、同胞たちは、彼女の血筋と能力と年齢のために重んじ、尊重した。彼女は熱情と雄弁のすべてを傾けて計画を棚上げにさせようと試みた。だが無駄だった。みな彼女に従わないのを知って、自分は後に残り、同胞が恐れ知らずにも放棄する土地の保有を続けると言い放った。(207)

というのだが、老女のことはともかくとしてほぼ史実をなぞるこうした状況⁽³⁾のうえに、「この氏族が居住していた村落は、今私の叔父の内庭と果樹園があるところにあった」(EH 207)ということであれば、彼女こそインディアンの帰還の背後でそれを操っていた存在で

あることが、あとで考えれば納得できるのである。

所有の不安

どうやらこれらはみな、社会に知られた何らかの自己が、財産、相続権、地位、信用、容姿、顔、声、著作物、エトセトラの集積体を所有している、というような考えが基底にまずはあり、そのうえで、果たして本当にそうだろうか、こうした所有の対象を所有者から分離することは、けっして困難ではないのではなかろうかという、分離の可能性も並行して意識されている、ということである。所有権は大前提であり、同時にきわめて不安定である。

「社会から隠された自己」、プライバシーの対象も所有されるものである。所有権の不安定化は、ここでも起こる。意識を持った主体とその行動の分離、そしてその結果として自分のしたことを自分の探求の対象にする行動は、社会的な自己とその所有物の分離という、ブラウンにおける大きな動機群の一部である。

こうした動機群の性質について、ブラウンの好んで取り上げる「善意」の物語をめぐって考えることもできる。

「善意」の物語は、分離が起こっているところで、分離された所有物を本来の所有者に返還しようという動機から派生する。疫病救援の善意の物語において、マーヴィンがフィラデルフィアに戻るのには、一般的救援意思の表れでもある。だがそれは、ハドウィン家の姉娘の婚約者ウォレス (Wallace) を救出して、彼女のもとに彼を返還するためではなかったか？「あの町へ急行しよう。彼〔ウォレス〕の居所を探し出し、生死を確認しよう。まだ生きているなら、そばにいて慰めてやることで、健康の回復を手伝えるのではないか。そして家族の胸の中へ、彼を再び導けるのではないか」(AM 134) と、マーヴィンは考えるのだ。エドガーによるクリゼロ救援の善意の物語において、エドガーは、クリゼロが才能と教育によって手に入れていた地位へとクリゼロを返還しようとして躍起となるのではなかったか？

彼女〔ロリマー夫人〕が今も生きていて、サースフィールド夫人としてまずは幸福にしていること、そして実は大西洋のこちら側に住んでいることを彼に知らせてやれば、彼に付きまとい悩ましていた血なまぐさい幻影は吹き散るだろう。病んだ頭脳は回復し、彼の教育にふさわしい社会的地位と彼の才能にふさわしい職業とに、彼を再び戻すことができるだろう。こうした考えに動かされて、私は彼の隠遁所を訪れることに心を決めた。(EH 286)

つまり、これはそもそも無償の「善意」なのだろうか、と思うのである。むしろ、所有者か

ら分離してしまった所有権を回復させようとする、所有権への頑なな信念のようなものなのではなかろうか、と思うのである。

信念が頑ななのは、それに脆弱なところがあるからに違いない。

ピーター・ケイファーが伝えるチャールズ・ブロックデンの父親イライジャ (Elijah) の生涯は興味深い。イライジャは、1740年にペンシルバニア植民地チェスター郡ノッティンガムで、この地のクエーカー教徒ジェームズ・ブラウンの第三子として生まれた。1750年にイライジャの母が死亡。その年のうちにジェームズはエリザベスと再婚、エリザベスとの間にさらに三子を儲けることになる。1757年、イライジャはノッティンガムのクエーカー月会 (Monthly Meeting) を離れ、フィラデルフィアの月会に所属を移す。都市で商人として歩もうとしたのだが、その9カ月後、父親ジェームズと継母エリザベスの間に新しく生まれた彼らの間の子は、何と「イライジャ」と名づけられる。「まるでもう一人のイライジャ、フィラデルフィアで商人の修業を始めたばかりの健康な17歳の若者は死んでしまったかのようなだった」(Kafer 26)。その後ある時期までは順調に商人への道を歩むイライジャだが、1768年、債務不履行によりフィラデルフィアの月会から除名される(30-31)。クエーカーの共同体の縁辺部に社会的な位置が移動したと言えるだろう。それにもかかわらず、独立戦争中の1777年9月1日から78年4月にかけて、イライジャは他の20名ほどの有力なクエーカー教徒や王党派とともに、革命派によってバージニア植民地のウィンチェスターに連行され、幽囚の憂き目を見るのである(1-14, 34-5)。

父ジェームズから相続権をはく奪され、クエーカーの共同体から本来の権利をはく奪され、独立派によって社会的地位を、不条理な形ではく奪された自分の父イライジャの個人史を、家族史から継承しなかったはずのないチャールズ・ブロックデンである。財産や権利を本来の所有者に返還する動機、所有権確認の動機だけが他を押し、そして純粹であったとしても不思議ではないところだ。

しかしこの所有権確認の動機と並行して、分離を固定しようという動機が、明瞭に観察される。『エドガー・ハントリー』は、ペンシルバニアの本来の所有者であったデラウェア族インディアンが、それを回復しようとして帰ってくるのを、夢魔の中で殺戮する主人公の物語にほかならない。そして、メアリー・ワルドグレイヴという他人の財産と結婚によって結合しようということから、クラリスという別の他人の財産との結婚による結合へと、失敗に終わるものの、方針を転換しようとする若者を主人公とする物語にほかならない。他人の所有物を自分のものにしようという動機も、所有権確認の動機系の背後に隠れながら、公言はされないし、抑圧さえされていると思われるものの、はっきりと存在している。

こうして、ブラウン小説群から共通して引きだすことができるのは、所有権確認と所有権分離の、同じように強い動機群である。所有権はこの上なく重要なのだが、完全に安定しきってはいない。完全に安定しきっていないだけに、この上なく重要である。「所有の不

安」と呼びうるそうした状況が、ブラウンには、あきらかに存在する。抑圧されて存在する。財産、プライバシー、容姿や立居振舞の自己所有は、自己の形成の根幹として措定されている。それと同時に、それと並行して、それらの所有権は疑われ、分離が想像されている。

財産、プライバシー、容姿や立居振舞の自己所有の前提には、リベラルな個人による自己の身体の自己所有の観念がある。それを公理的に定式化したのが、ジョン・ロック (John Locke) の「どの人間も、自分自身の身体への固有の所有権を持つ (“[E]very Man has a Property in his own Person”）」(287) という言であるとされている。ブラウンではこの公理的な定式化が、公理化一歩手前あるいは公理化進行中の、流動的な状態に引きもどされている。「偶然が財産をその手に委ねた人間こそが、純正の所有権者である」(AM 94)、そのときそれを持っている者がその所有者である、とウェルベックは言う。なんだかめまいを覚える。固有の所有権の対象たる身体の労働から生じたものに対して固有の所有権が生じる、それが財産だと唱えるロック的な基底の動揺が、そこに感知されるからにほかならない。

このロックの公理的定式化、そして生命、財産、自由、自己やプライバシーの自己所有という啓蒙の基本原理は、中世的なものへの反定立であること言を俟たない。だが、それをマーケット状況の中で見るとどういふことが言えるだろうか。そこでは固有の所有権の対象となりうるものだけを自己から分離して売ることができる。逆に、それに対する固有の所有権を譲渡しうることこそが、あるものが固有の所有権の対象たりうる条件である。持っているものしか売れない。売れるものは持っているものだ。これを人間に当てはめるなら、人間が誰か他の人間の持ち物となりうることこそが、人間が自分自身の持ち主だと言えることの条件である。そうジェニファー・グリーソンは言う (Greeson, “Prehistory” 918)。具体的歴史状況に照らして言うなら、非西欧 (アメリカ、アフリカ) に対して行われた実践的活動、土地の奪取とその所有、他の人間の人格と身体の所有という活動を事後に正当化する言説形成として、この公理的定式化が行われているのだと、彼女は言う。自己を所有できるという検証不可能な考えを公理化できたのは、他者の自己なら所有できるという検証可能な事実が背景にあったからだ、というのである。近刊予定の自著の内容を概説して、彼女は述べる。

第三章「所有的個人主義前史」は、ロックが「財産」と「個人というもの」を共生関係に立つ概念として創造したことを検討する。自己の所有を人間であることの基底的条件と定めたことを検討する。私の議論はいわば常識的なもので、自己の所有によって人間が定義されると考えることができるために、ロックはまずもって自己というのは所有されるようなものであると理解していなければならなかった、というものだ。言いかえれば、大西洋奴隷貿易における人間の商品化が、ロックによる

リベラルな個人の定式化に必要な前提条件だった、というものだ。……そうすれば私たちは、『統治二論』を新しい目で再読し、ロックがアメリカと近代における家畜扱いの奴隷制に頻繁に言及するのを……単なるメタファーではなく、財産と個人というものに関する彼の思考の基底的構造の一部であると見ることができる。
(Greeson, “American Enlightenment” 12-13)

ブラウンにおける所有の不安には、エリザベス・ハインズが論ずるように、“early modern”(日本史で言う近世)から“modern”(日本史で言う近代)への転換期に伴って所有の主体が世襲的身分から個人へとシフトして行くことへの不安や動揺も、たしかにかかわっていることだろう。

ブラウンはエドガー・ハントリーをこのジレンマの核心に置く。擬似的にしか封建的でない秩序内で地位を渴望する彼にできることは、失われた機会への意趣返しでしかない。いまだに可視的な「現実の」財産、「形成する」よりも相続する方が適切な財産に基礎を持つ経済に慣れ親しんだ文化の中に住むエドガーは、可視的ではあるが徐々に姿を消しつつある「文明の神話」と運命を共にするのである。(Hinds 134)

だがそれは、そもそも自己の所有を含む所有権の基底性と無根拠性、すなわち自明性が一方で強固に信じられ、同時に深く疑われているという、より広い布置の中にある。“the Middle Ages”(中世)に代わる“modern period”(近代)全体の布置である。

さらに、近代の出発要件の第一のものが大航海時代に始まる西洋の拡大運動であったことを考えるなら、アメリカを所有できるのかという決して明瞭には言語にならない不安もそこに揺曳するのを見ることは、困難ではない。所有の主体と所有されるものの分離と結合の動機群が、確信や確定を欠いて繰り返されるブラウン小説群の風景は、なにやら何度も見たことのあるような気分を読む者に起こさせる。それは、これがロレンスからフィードラー、そして八木敏雄を経てわれわれが継承した“the American uncanny”の原風景だからでもある。

注

- (1) ブラウンが友人のウィリアム・ダンラップ(William Dunlap)に、その後失われることになる『スカイウォーク(Sky-Walk)』の完成原稿を渡したのが、1798年4月中旬のことであり(Krause 308)、1799年

- 2月初めには『アーサー・マーヴィン、第一部』を完成させ、すぐに『エドガー・ハントリー』の執筆を開始して春の終わりに完了したとされている。「夢遊病、断片」は、『スカイウォーク』と『エドガー・ハントリー』の間、1798年4月から1799年春の間のどこかで執筆されたと推定されている (Krause 332-33)。これが『エドガー・ハントリー』の失敗に終わった第一稿であるとの説は排除しきれないが、『スカイウォーク』の一部とは考えにくいということだ (Krause 332-34)。発表されたのはずっとのちになって1805年の *Literary Magazine* 誌であった。
- (2) ついでながら、通常プライバシーの侵害と理解されるはずの、この行動の動機の半分は、苦しんでいる人を助けたいという「善意」からきている。ブラウンにおける「善意」を「探索」に名目を与えるためのものであるということも、それが正しい社会的道徳としての善意であるということができると同じ程度には、可能である。マーヴィンの黄熱病患者救済を、病人を探すと称して他人の家に入りこむための名目を提供していると見ることは、できない相談ではない。
- (3) 1737年に、ペンシルバニアの首席裁判官で、ペン家二代目の利益代弁者であったジェイムズ・ローガン (James Logan) が、デラウェア族の土地を大量詐取した。この事件は“Walking Purchase”として有名である。1686年にウィリアム・ペン (William Penn) がデラウェア族からソールベリーや北方のトヒコン (Tohickon)・クリーク「から南へゆっくり3日歩いて行ける範囲の」土地を買った契約書があった。ローガンは、これを英語の読めないデラウェア族に見せ、トヒコン・クリーク「から北へ、あらかじめ森の中に道を作り、糧食を運ぶ馬を連れて、プロの歩行者が全速力で3日歩いて行けた範囲の」土地を、「買った」。デラウェア族 (Forks Delaware) を当時の居住範囲の事実上すべてから移動させるために、ローガンはイロコイ連合同盟。デラウェア族は、サスケハナ川、オハイオ川流域など他地域に移動を強いられた (Kafer 173)。

引用文献

- Brown, Charles Brockden. *Arthur Mervyn; or Memoirs of the Year 1793, First and Second Parts*. 1799; 1800. Ed. Sydney J. Krause. Kent, OH: Kent State UP, 1980.
- . *Clara Howard; in a Series of Letters*. 1801. Ed. Sydney J. Krause. Kent, OH: Kent State UP, 1986.
- . *Edgar Huntly; or The Memoirs of a Sleepwalker*. 1799. Ed. Sydney J. Krause. Kent, OH: Kent State UP, 1984.
- . “The Man at Home.” *The Rhapsodist and Other Uncollected Writing by Charles Brockden Brown*. Ed. Harry R. Warfel. New York: Scholars’ Facsimiles & Reprints, 1943. 27-98.
- . *Ormond; or The Secret Witness*. 1799. Ed. Sydney J. Krause. Kent, OH: Kent State UP, 1982.
- . “Somnambulism: A Fragment.” 1805. *Somnambulism and Other Stories*. Ed. Alfred Weber. Frankfurt am Main: Verlag Peter Lang, 1987. 5-24.
- . *Wieland; or The Transformation, An American Tale*. 1799. Ed. Sydney J. Krause. Kent, OH: Kent State UP, 1977.
- Fiedler, Leslie. *Love and Death in the American Novel*. 1960. Champaign, IL: Dalkey Archive Press, 1997.
- Greeson, Jennifer. “American Enlightenment: The New World and Modern Western Thought.” *ALH* 25.1 (2013): 6-17.
- . “The Prehistory of Possessive Individualism.” *PMLA* 127.4 (2012): 918-24.
- Kafer, Peter. *Charles Brockden Brown’s Revolution and the Birth of American Gothic*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2004.
- Krause, Sydney J. “Historical Essay.” *Edgar Huntly*. By Charles Brockden Brown. Ed. Sydney J. Krause. Kent, OH: Kent State UP, 1984. 295-400. Vol. 4 of *The Novels and Related Works of Charles Brockden Brown*. Sydney J. Krause, gen. ed. 6 vols. 1977-87.
- Locke, John. *Two Treatises of Government*. Ed. Peter Laslett. Cambridge: Cambridge UP, 1960.

Hinds, Elizabeth Jane Wall. *Private Property: Charles Brockden Brown's Gendered Economics of Virtue*. Newark, DE: Delaware UP, 1997.

Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790-1860*. New York: Oxford UP, 1985.